

岡崎正先生を送る

石 割 透

岡崎正先生は、本学の規定により、本年三月末日をもって、本学をご退職されねばならないこととなった。先生はなお、身体も壮健であられることを思うにつけ、国文科一同、誠に残念であるとの思いを禁じ得ない。本誌も特集号を編み、先生をお送りすることになった。

岡崎先生は、一九七七年四月から国文科専任教授として教鞭をとられ、その間一六年、教育にも終始熱心であられた。とともに、短期大学部長の要職を二期、四年にわたってお務めになった。そうした御多忙の際にも、先生には短期大学紀要の類にも、期日に遅れることもなく、いつもご論考を準備し、発表して戴いた。先生のお人柄は終始温厚、私などは、いろいろな機会に相談にのっていただいたわけ

だが、そうした先生が国文科を去られることは、私個人としてもまことに寂しい限りである。

先生は昨年七月、研究の中仕切りとして、ご高著『物語・謡曲の研究』を自らの手で編まれ、刊行された。そこに端的に窺えるように、先生のご研究対象は、「様式論的立場」に基づき、平安歌物語から謡曲、それとの関わりから近代の美文、子規などに、更に「世界文芸の中の日本文芸、その普遍性と特殊性とを探ろう」とする意図から、ラフカディオ・ヘルンや西洋中世ロマンにまで及ぶ。専門分野を異にするのみならず、学問らしい学問もしていない私が、こうしたことを述べるのは、先生に対して非礼の謗は免れないが、先生のご研究の対象は極めて多様で幅広く、そのご論考も、長い研鑽の時間を自然に読み手に感じさせるそれであったとの印象を私は得て、研究の恐ろしさを痛感したこともあった。私家版として刊行され、私もご高著を拝読する榮に浴したわけだが、そうした控え目な刊行のなされ方にも、岡崎先生のお人柄が思われる。

先生は、若い頃には山歩きを好まれたようである。また、

日本酒を愛好され、全国のお酒の銘柄のレッテルを収集されている、とも伺ったことがあるが、その飲まれる時の態度も、いかにもお酒を愛好しているといった、終始スマートなものである。私など、否、私は、このことだけでも先生を是非見習いたいものであるが……

過渡期の厳しい時代で、どこの大学においても、多かれ少なかれ、教員が落ち着いて学問・研究に没頭できることは難い時代である。昨今、今後の先生は、大学の雑務から離れて研究三昧の生活を送られる様子であられることは残念な反面、誠に羨ましく感じられてならない。今後とも健康に留意され、次々とご研究の成果をおまとめになり、後進の私達に刺激を与え続けていただくことを切望するとともに、先生のご講義をなにかの機会に、また拝聴するのを楽しみにしている。

